

小田島は、秋場建設の江川宛にメールを送信すると、その後、今井設備の芦田に電話を入れた。

「はい、今井設備でございます」

「旭工業の小田島と申しますが、営業部の芦田さんをお願いします」

「少々お待ち下さい」

「はい、営業部です」

「旭工業の小田島と申します。いつもお世話になっております。恐れ入りますが、芦田さんをお願いします」

「申し訳ありません。芦田はただ今席をはずしておりますが」

「何時頃お戻りになりますか？」

「今日は一日、赤坂の本社へ行っておりますので、恐らくこちらへは戻ってこないと思います」

「そうですか。明日の予定はいかがでしょうか？」

「明日は八時半にはこちらへ出社する予定です」

「では、明日の朝でも構いませんので、海老名支店の方にお電話いただきたいとお伝え願えますか？ 一応電話番号を申し上げます。〇四六―二三一―一八一です」

「〇四六―二三一―一八一ですね。失礼ですが、お名前をもう一度お願いします」

「旭工業の小田島です」

「旭工業の小田島様ですね。明日の朝、芦田に申し伝えます」

「よろしく願います」

「失礼します」

受話器を置くとすぐに小田島の電話が鳴った。

「はい、小田島です」

「秋場建設の江川です。お世話になっております。先程送っていただいたメールの件でお話したいことがあるのですが、今お時間は大丈夫でしょうか？」

「すみません。この後ちょっと打合せが入っているんですよ。先程のメールですが、一応大まかな部分についてだけ先に目を通していただこうと思って送らせていただいたのですが、詳しい内容については一度お会いしたうえで…と考えております。いかがでしょうか？」

「はい、構いません。明日以外でしたら私はいつでも結構ですので、小田島さんのご都合のいい日に合わせます」

「それでは、来週の火曜日はいかがでしょう？ 一月二十一日ですが」

「はい、大丈夫です」

「では大変申し訳ありませんが、時間と場所については近いうちに追ってこちらからご連絡するということでよろしいでしょうか？ 勝手言っすみません」

「とんでもないです。携帯のほうにかけてもらえれば、いつでもつながりますので」

「わかりました。では失礼します」

小田島は電話を切ると、慌てて応接室へ向かった。